

態度と呼応のためのプラクティス no.01

坂本光太(チューバ奏者) × 和田ながら(演出家)

ごろつく息

2021. 12. 29 (Wed.) 19:00 Start

会場 | Venue

トーキョーコンサーツ・ラボ | Tokyo Concerts Lab.

主催 | Organizer

東京コンサーツ | Tokyo Concerts 〈文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業〉

助成 | Grant

公益財団法人 セゾン文化財団 THE SAISON FOUNDATION *和田ながらに対して

態度と呼応のためのプラクティス

この度、若手・中堅の音楽家を起用する企画シリーズ『態度と呼応のためのプラクティス』を開始します。

個々のアーティストがこれまで積み上げてきた経験値や技術を、自らの内に存在する「態度」と定義し、他分野との協働による「呼応」を通じて、その先の未知なる表現へ向かうための実践（＝「プラクティス」）に取り組みます。

第1回目となる今回は、現代音楽、実験音楽、即興を主たる領域としつつ、多彩なジャンルで才能を発揮するチューバ奏者の坂本光太を紹介します。政治や社会のあり方と芸術の関係について関心を持つ坂本は、作曲家V.グロボカールの作品を中心に、批評性をはらむ、あるいは社会参与としての側面を持つ音楽作品に焦点を当て、演奏・研究活動に取り組んできました。

協働を行うゲストには、演出家の和田ながらを迎えます。演劇ユニット「したため」を主宰し公演を企画するだけでなく、リサーチプロジェクトにも関わるなど、作品の形式を問わない多角的なアプローチを行ってきました。舞台演出においては、生活の周縁に存在する言葉や小さな気づきを掬い取り、俳優との丁寧な対話から作品を生み出しています。

実験的技巧や語りの構築といったそれぞれの表現手法を持ち寄りつつ、外へのまなざし、他者との関係という共通の視点をもった両者による試みをとおして、シアトリカルな手法を含む楽曲や既存の器楽作品の解釈に新たな視座を見出し、また、演劇作品としても音楽的要素を含んだ新しい表現を目指します。

演奏作品

長洲仁美／和田ながら

《浮浪》

NAGASU Hitomi / WADA Nagara: *Flow* (2021)

チャーリー・ストラウリッジ

《カテゴリー》 *日本初演

Charlie SDRAULIG: *category* (2013-14)

ヴィンコ・グロボカール

《エシヤンジュ》

Vinko GLOBOKAR: *ÉCHANGES* (1973)

坂本光太／和田ながら

《オーディションピース》

SAKAMOTO Kota / WADA Nagara: *Audition piece* (2021)

池田 萌

《身体と管楽器奏者による序奏、プレリュードと擬似的なフーガ》 *委嘱初演

IKEDA Moe: *Introduction, Prelude and Fuga-ish music by a Body and Wind instruments player* (2021)

坂本光太／長洲仁美／和田ながら

《一番そばにいる》

SAKAMOTO Kota / NAGASU Hitomi / WADA Nagara: *The closest* (2021)

プロフィール

坂本光太 | SAKAMOTO Kota

チューバ奏者。1990年生まれ。現代音楽、実験音楽、即興演奏を中心に活動。

ヴィンコ・グロボカール作品の社会参与についての研究を行っている。

近年の出演・作品・リサイタルに、「暴力／ノイズ／グロボカール」(BUoY、東京、2020)、『あそびのじかん』関連プログラム「この宇宙以外の場所」(東京都現代美術館、2019)「Looking Ahead vol.3: 無伴奏チューバの半世紀」(eitoeiko、東京、2019)『OPEN SITE 2018-2019「米田恵子(1912-1992)の作品と生涯について」』(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2018)など。共著に「音楽で生きる方法」(青弓社、2020)。

京都女子大学助教、上智大学非常勤講師。「実験音楽とシアターのためのアンサンブル」メンバー。博士(音楽)

和田ながら | WADA Nagara

2011年2月に自身のユニット「したため」を立ち上げ、京都を拠点に演出家として活動を始める。同世代のユニットとの合同公演も積極的に企画し、また、美術家や写真家など異なる領域のアーティストとも共同作業を行う。

近年の受賞歴に、「こまばアゴラ演出家コンクール」観客賞(こまばアゴラ演出家コンクール実行委員会、2018)、創作コンペティション「一つの戯曲からの創作をとおして語ろう」vol.5最優秀作品賞受賞(福岡市文化芸術振興財団、2015)。

2018年より京都木屋町三条の多角的アートスペース・UrBANGUILDのブッキングスタッフ。2019年より地図にまつわるリサーチプロジェクト「わたしたちのフリーハンドなアトラス」始動。2021年度セゾン文化財団セゾン・フェローI。

長洲仁美 | NAGASU Hitomi

茨城県出身。京都造形芸術大学映像舞台芸術学科映像芸術コース卒業。

卒業後に、dracom、大橋可也&ダンサーズ、Marcelo Evelin、したため等の作品に出演。

すごくない演奏・オーラのない演奏・しょぼい演奏

坂本光太

現代音楽が権威になって（おそらく）久しい。

既存の権威に対するカウンターとしての役割はもはやすっかり消えて、大学機関や（そこでの教員が審査する）コンクールなどを通じてその価値をぐるりぐらりと再生産しているような気がする。演奏する方も、自分たちの演奏の価値がその威信によって守られていて、とりあえず「大層なもの」「立派なもの」として扱っている部分があるんじゃないかって思います。

私は、すごくなさそうな演奏がしたい、オーラのない演奏、しょぼい演奏がしたいと、思っています。今回は演奏家がすごそうに見えない方法や楽曲を選びました。

作品解説

坂本光太

チャーリー・ストラウリッジ 《カテゴリー》

Charlie STRAULIG: *category* (2013-14)

C. ストラウリッジはオーストラリア、メルボルン出身の作曲家。B.ファーニホウの指導の下、スタンフォード大学で作曲を専攻し博士号を取得、現在はメルボルン音楽院の講師、メルボルン大学トリニティ・カレッジにて教鞭を取る。ストラウリッジの作品はしばしば、微細な音や身振り・態度に焦点を当て、音楽における状況のソーシャル・ダイナミクスに注目させる。

チューバ独奏のための《カテゴリー》は、Max MURRAYの委嘱によって2013-14に作曲された。演奏時の、その場・その瞬間のアンビエント・サウンド（環境音）をめぐるチューバ奏者の主観的な解釈によって、アンブシュア（演奏時の口の形）の弛緩・緊張が決定される。微細な変化を伴う静謐なノイズが、極端に引き伸ばされた時間感覚を引き起こす。日本初演。

ヴィンコ・グロボカール 《エシヤンジュ》

Vinko GLOBOKAR (b.1934): *ÉCHANGES* (1973)

《エシヤンジュ》は、トロンボーン奏者・作曲家のV.グロボカールによって作曲された、任意の金管楽器による独奏曲である。曲名は「交換」の意味を持つ仏語「échange」に由来。

本楽曲では、通常の楽譜で示される絶対的な音の高さ・定量的な持続（長さ）は全く指定されず、「音を出す方法」のみが指定される。「音を出す方法」は「唄口（発音体）」「ミュート」「ダイナミクス」「アーティキュレーション」という4つに分解され、そこからさらに4つに分化した具体的な演奏指示が図形によって指示される(表)。それらの組み合わせ、4の4乗=256通りの演奏方法が、この楽曲の譜面には連綿と記譜されている。

唄口（発音体）	ミュート	ダイナミクス	アーティキュレーション
金管楽器	ストレートミュート	身体的限界で	グリッサンド
木管楽器（シングル）	ブランジャーミュート	増加していくエネルギーで	フラッターツング
木管楽器（ダブル）	シンバル	弱まっていくエネルギーで	トリル
笛	抜き去ったチューニングスライドから音を出す	エネルギーなしで	スタッカート

以上の指示に従って、演奏家は、唄口やミュートを絶えず「交換」しながら、慣れない発音方法によって、256種類を数えるノイズを生産し続けることとなる…はずなのだが、作曲家本人の自作自演録音を聞くと、楽譜を無視した「即興」が繰り返られているのがわかる。本日の演奏では、おそらく史上初となる、「記譜通り」の演奏を目指す。

《身体と管楽器奏者による 序奏、プレリュードと擬似的なフーガ》

Introduction, Prelude and Fuga-ish music by a Body and Wind instruments player (2021)

池田 萌

「人間の消化器官は省略すれば一本の管である」というような意味の文を見たことがある。管楽器も同じく、あのぐるぐるやピストンや穴などを省略するとしたら、一本の管である。そんなところから、人間と管楽器との違いはどこにあるのか、また、人間からシームレスに管楽器に移行するとしたら、どのような表現がありえるのかを考えた。

以下、スコアより抜粋。

身体である *Player A* (以下Aと呼ぶ) を、管楽器奏者である *Player B* (以下Bと呼ぶ) が楽器として彼／彼女を構え、その演奏形態により奏でる序奏と前奏曲とフーガの成り損ない。ただし、その楽器 (A) は人間の身体であるので、発声したり動いたりする。前奏曲とフーガの声部を構成する要素は、鍵盤楽器などによるフーガのような耳で感ずる音響だけであるとは限らない。

池田 萌 | IKEDA Moe

作曲家。1986年石川県生まれ、大阪府在住。愛知県立芸術大学卒業。IAMAS (情報科学芸術大学院大学) 修了。「第33回現音作曲新人賞」入選 (日本現代音楽協会、2016)。主な作品に「演奏家の選択」のルールに従ってその場で音楽を生成する「選択音楽」シリーズなど。

予言と遡行

和田ながら

楽器のことどう思ってますか？ チューバってどうやって音を出してるんですか？ 倍音？ マウスピースってなんですか？ 人の声が優先されない場面はありますか？ なにをイメージして演奏してるんですか？

恥ずかしがりようもないぐらい初歩的なことを雨あられと尋ねつづけたクリエイションだったように思う。ど素人の質問に坂本さんはひとつひとつ丁寧に応じてくださり、わたしはそのたびに、へ～とかほ～とかげらげらとか、驚いたり納得したり、それから、スカッとしていた。わたしはチューバについてまったくなにも知らなかった。坂本さんが語る楽器や技術や身体への操作は、わたしにとってものすごく明瞭で爽快だった。

ディシプリン、という単語が頭の中でカラッと鳴る。

こうなってくると、あいまいな湿度でちょっかいを出したくなる。

俳優の長洲仁美さんをこの企画に誘ったのはほとんど直感だったのだけれども、こういう直感はいたい外れない（しかし、外れた直感のことを覚えていた試しがあるだろうか？）。舞台の上でどこまでも実直に揺らぐことができる（我ながら奇妙な表現だと思うがそうとしか言えないのだから仕方ない）彼女は、このクリエイション中、俳優の仕事について、他者と共にどのようにそこにいられるかを探る仕事であると言った。それはまさしく、この現場で問われていることに違いなかった。作曲者と、楽譜と、楽器と、演奏者と、観客（演出家はおそらくここに含まれる）。ばらばらなわたしたち他者同士は、この通りのちぐはぐなままでも、ここでごろごろしていただけるだろうか。

そう、はじめに「ごろつく息」というタイトルをつけた。このタイトルをつけたとき、公演に参加するメンバーは確定し、坂本さんが演奏曲の候補を挙げていて、池田さんから新作のメモ（ひと目で、この曲を初演できるなんて嬉しい、と思った）が届いていた。とはいえ、それだけだった。それだけの時につけたタイトルである。

演劇をつくる時もおおむね同じだ。演技の具体的なところはほとんどなにも決まっていないような時に、しかし、タイトルは先につけなければならない。広報の準備とか、そういう事情によって。そして、タイトルがほとんどすべてを決めてしまうようなところがある。タイトルは予言なのかもしれない。あるいは、タイトルに遡行していくようにわたしたちはつくってしまうのかもしれない。

「ごろつく」とは、ごろごろと音をたてること。ごろごろところがること。ごろりと横たわること。働かないでぶらぶら遊ぶこと。目的もなくうろつくこと。目などに異物があって、すっきりしないこと。

予言された「ごろつく息」に遡行していくように、ここに来ました。

そうですね。管楽器奏者も俳優も、息を扱うのが仕事です。

出演 坂本光太

演出 和田ながら

出演（俳優） 長洲仁美

音響 甲田 徹

演出助手・照明 小原 花

作曲（委嘱作品） 池田 萌

フライヤーデザイン 関川航平

記録撮影 後藤 天

制作 西村聡美（東京コンサーツ）

